

# PRO-LIFE

中絶に反対する運動

1997年11月 No.83

## 胎児を守る運動

# 愛の呼びかけ

今日、平和を破壊する一番の原因は中絶にあると思います。それは子どもへ向けられた戦争であり、何の罪もない子どもの直接的殺人であり、母親自身による殺害であるからです。

もし母親が自分の子を殺してもいいと認めてしまったら、どうしてお互いを殺してはならないと教えられるでしょうか。どのようにして女性から中絶を思い止どまらせる事ができるでしょうか。それは常に愛情をもって女性を説得する事であり、愛というのは苦しくなるまで与え続けるものである事を思い出させる事です。イエスは私達を愛するために自分の命をも与えて下さいました。ですから、中絶を考えている母親には、愛する事を教え、自分の計画や自由になる時間を苦しくなるまで与え続ける事、そして自分の子どもの命を尊ぶ事を理解させなければならぬのです。そして父親もやはり同じなのです。中絶は母親に愛する事を学ばせるどころか、自分の問題解決のために自分の子どもを殺してしまってもよいと教える事になります。

しかも中絶は、父親に当たる人

には一切の責任を負わせないので、このような男性は別の女性にまた同じ思いをさせるでしょう。中絶は更なる中絶を呼び起こすだけなのです。

中絶を認める国は、人々に愛することを教えずに、欲しいものを手に入れるためには暴力を使っても良いという誤った事を教えています。だから、この中絶は愛情と平和を破壊する最も危険な要素なの

**「イエスがあなた方の一人一人を愛したように、互いに愛し合いなさい。そして、心にとめてください。愛の働きは平和への働きであることを。」**

**マザー・テレサ**

事を心配してくれる人はたくさんいます。また、暴力事件に心配を寄せる人もたくさんいます。このように心配する事は非常にいい事です。しかし、そのような人々も母親の意志によって殺されていく何百万もの子どもの事は心配しません。これこそが今日の平和の破壊者なのです。つまり人々を盲目にしてしまふ中絶です。

だからこそ私はインドや訪問先において、「子ども達を連れ戻しましょう」と訴えているのです。子どもは神からの家族への贈り物です。子どもは一人一人が愛し愛されるという更なるものを願う神の特別なイメージや好みによって創造されているのです。子ども達を心配や関心の中心に連れ戻さなければなりません。これが世界が存続していくための唯一の方法です。子どもだけが未来への期待なので、すから。年老いた人々が神の元へ呼ばれるにつれ、その子ども達だけが後を引き継ぐ事ができるので、すから。

神は何とおっしゃっておられるでしょうか。「母親が子どもの事を忘れても、私はあなたを忘れませぬ。あなたの名前を私の手のひら

に刻みましたから。」とおっしゃっておられます。私達は神の手のひらに刻み込まれたのです。つまり、生まれてくる事のできなかった子どもも受胎の時点から神の手に刻み込まれ、愛し愛されるよう神に呼ばれていたのです。それはその生あるときに限らず永遠なのです。神は私達を決して忘れはしないでしよう。

ここに素晴らしいお話があります。私達は養子縁組によって中絶と戦っています。つまり母親の世話と同時にその子の養子縁組の面倒を見るのです。それによって何千人もの命を救ってきました。診療所や病院、警察などに「子どもを殺さないで下さい。子どもは私たちが連れていきます。」と呼びかけてきました。それで困っている母親には常に誰かが「さあ、あなたを助けてあげましょう。あなたの子どもには住むところを探してあげましょう。」と言ってくれるようになります。今では子どもを生む事のできない男女から驚くほどの要望が寄せられます。しかし、子どもを故意に生もうとしない過去を持つ人には決して子どもを渡さない事になっています。イエスは言いました。「私の名において子どもを受け入れた人は、私を受け入れたのです。」と。養子を迎えることでその男女はイエスを迎え、中絶によって人はイエスを拒む事になるのです。

# 二十世紀のラザロ

(ルカ16・19～31)

天国に召された人から教訓を学ぶことは多いが、「ある金持ちとラザロ」では地獄へ墮ちた人からも教訓を学ぶことができる。

あの金持ちはなぜとがめられたのだろうか。彼がなんでも手に入れ過ぎていたから？それとも衣食に関して生まれつき罪深さが伴っていたからだろうか？

いや、違う。金持ちが地獄に墮ちたのは、彼が他人を無視したからである。彼は自分がしたことに対してとがめられたのではなく、しなかつたという事実をとがめられたのであった。彼はラザロを自分と同じ兄弟のように扱わなかったのである。その代わりに彼はラザロの地位が自分よりずっと下であると判断したため、ラザロ自身も彼にとって価値のない存在と決めつけたのだ。その貧乏人の叫びは聞き入れられなかったのである。

私達が当時その場にいたらどうしていたら、という問いかけがここにはある。実際私達は今そこにいるのである。現在の私とあなたにはラザロとの約

れでも彼らは「関係もないのに中絶しようという女性の邪魔をするなんて。」と口にする。今私に教えてあげよう。関係がないのではなく、あなたはその子宮の中にいる子どもの兄であり姉なのである！

「彼女の選択についてとやかく言うなんて私は一体何者だろうか？」あなたはだれかが殺されようとしているところを目撃したら立ち上がった、「ノー！」と言える良識ある人間である。

「彼女の選択についてとやかく言うなんて私は一体何者だろうか？」あなたはだれか一人に対する不当な処置は全ての人間に對する不当な処置であることに気づいている知恵のある人間である。また自分の命の安全はまだ生まれてこない子どもと同じくらい不安定なものであることにも気づいているはずだ。

「彼女の選択についてとやかく言うなんて私は一体何者だろうか？」あなたは、あなたが私の兄弟にすることは、すべて私にしていることになる。」と語った神の弟子である。だれかを餓死させたら、それはキリストを餓死させたのと同じことだと我々は信じているはずだ。病人を放っておくことはキリストを放っておくのと同じことではないだろうか。そして子宮内の子どもを引き裂き、焼き、粉々にし

## 生命の選択

が生きるに値し、愛と同情を受けるに値すると知る権利があるのです。愛によって私達は、傷ついた人、苦しんでいる人に接します。他人の苦しみを避けてはなりません。それも人生の出来事のうちなのです。

自分のものであれ他人のものであれ、苦しみは、その対応によってより強く成長するか、あるいは弱いものを迫害する野獣と化すかの分かれ目となるのです。

しかし、我々は、他の生物の意思によって生命を絶たれる動物ではありません。我々は、生命と愛を豊かに与えて下さる神の愛によって生まれるのですから。

キリストは、私達がその尊い生命に値すると信じて犠牲となられました。そして今、主は私達に選択を与えて下さいます。自己中心よりも愛を、弱者を避けたり、破壊したりするより助けることを。

私は生命のために愛の道を進むでしょうか？そしてあなたは？

C・R・シェーティス

問題が持ち上がった時、私達の社会では自分以外の人や物のせいにするのが常ですが、善悪の判断を個人の責任でし、その結果については個人が受け入れることを、私達はそろそろ学んでいってよいのではないのでしょうか。

自己中心的な自分達を乗り越えて、幸福や満足は求めたり買ったりできるものではないことを理解すべきです。それらは愛情の副産物であり、その愛は単に自分の家族にだけでなく、胎児やお年寄り、障害者への広い愛です。

愛は、情熱にまざるものです。真実の愛は利己的ではなく、利他的です。態度で示すもので、ひとつの選択肢です。私達の自尊心のバロメーターともなります。

人生は相互依存しているから面白いのであって、人は誰でも自分で捨ててしまうことは、キリストを引き裂き、焼き、粉々にして捨ててしまうことに等しいはずである。つまり子宮にいるのはキリストなのだ！ある命のためには立ち上がるのはキリストのためには立ち上がることになるのである！

もし中絶が間違ったことでは

いのなら、間違ったことなど何もありえはしない。まだ生まれてこない子どもの苦境を個人として、教会として、あるいは国として取り除いてやるうとしなければ、私達は魂を失ったも同然である。実際に、二十世紀のラザロは私達の玄関のドアをたたいているのである。

フランク・ハイブーン

## 「自分は信仰を持っていると言う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つでしょうか」(ヤコブ2・14)

# 87

### いのちの福音に仕えること

キリストの尊い使命にあずかってわたしたちが行う、人間のいのちを支え伸張させる務めは、愛の奉仕をとおして成就されなければなりません。この愛の奉仕は、ボランティア活動、社会的活動、政治的活動といったさまざまな形をとる、個人的なあかしという姿で現れます。「死の文化」がこれほどまでに強力に「いのちの文化」に敵対し、時に優位に立っているように思われる今の時代では、このことはとくに急を要することです。それは、このような事態になる以前でも「愛の実践を伴う信仰」(ガラテヤ5・6)から生じる必要があります。ヤコブの手紙は次のように諭します。「わたしの兄弟たち、自分は信仰を持っていると言う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つでしょうか。そのような信仰が、彼を救うことができるでしょうか。もし、兄弟あるいは姉妹が、着る物もなく、その日の食べ物にも事欠いているとき、あなたがたのだれかが、彼らに、『安心して行きなさい。温まりなさい。満腹するまで食べなさいと言うだけで、体に必要なものを何一つ与えないなら、何の役に立つでしょう。信仰もこれと同じです。行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです」(ヤコブ2・14 - 17)。

愛の奉仕に携わるにあたり、わたしたちは一つの明確な態度に鼓舞され特徴づけられなければなりません。すなわち、他の人を世話する場合は、神がわたしたちに責任をゆだねた一個人として世話しなければならないのです。イエスの弟子として、わたしたちはだれに対しても隣人となるように(ルカ10・29 - 37参照) またきわめて貧しく、孤独であり、困窮のうちにある人たちに特別な厚意を示すよう求められています。胎児や死を前にして苦しむ高齢者と同様、飢える人、渴く人、外国人、裸の人、病人、捕らわれ人を助けるたびに、わたしたちはイエスに仕える機会を手にするのです。主自らこう語りました。「わたしの兄弟であるこのもっとも小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」(マタイ25・40)。それゆえ、わたしたちは聖ヨハネ・クリストモのこのうえなく適切な言葉に諭され、自分の行いについての決算を求められ、裁かれると感じざるをえないのです。「キリストのからだを尊びたいのですか。それなら裸でいるキリストをさげすんではなりません。教会堂の中で絹の布をあげてキリストを尊びながら、戸外にあって寒さと裸で震えているキリストをなおざりにしてはなりません」。

いのちがあるところでは、愛の奉仕は徹して首尾一貫したものでなければなりません。愛の奉仕は、偏見や差別を許容することはできません。それは、人間のいのちはどのような段階にあり、またいかなる境遇にあるうとも、神聖で不可侵だからです。人間のいのちは分割できない善なのです。ですから、わたしたちはすべてのいのちに対して、まただれのいのちに対しても、「気遣いを示す」必要があります。実に、いっそう深いレベルで、わたしたちはいのちと愛の根源そのものへ分け入る必要があるのです。

幾世紀にもわたって卓越した愛の歴史を築いたのは、すべての人に対するこの深い愛です。この歴史とは、いのちに対するさまざまな形の奉仕を教会と社会の中に生じさせてきた歴史で、公平な評価を下す人々は皆、このような奉仕に対して称賛の声を上げています。あらゆるキリスト者の共同体は、新たな責任感をもって、さまざまな司牧活動と社会活動をとおして、この歴史を書き続けなければなりません。そのためには、新しいいのちを支援するにふさわしい、実効あるプログラムが行われなければなりません。配偶者からの手助けすらなく、それでも恐れずに子供を産み育てようとする母親たちに対する、特別の親愛の情をもって行われなければならないのです。社会から見捨てられ苦しむ人のいのち、とりわけ死に臨むいのちに、同様の世話が向けられなければなりません。

# 神は人類の創始者であり、 人類は中絶の創始者である

中絶をめぐる論争は、単なる法律上の問題ではない。中絶は、人類の歴史上もつと注目すべき変化の一つと見なされてしかるべき問題なのである。

中絶論争における悲劇は、多くの人がその重大さに気づいておらず、中絶を支持するにあたって非常に感情的になっていくことである。その感情が高ぶれば高ぶるほど、自分の考えが正しいと固く信じるようになってしまふ。感情論は理論に結びつかず、何が本当に正しいか見えなくなってしまうのだ。中絶に対して強い感情を持つ人々は、中絶を知的にも道德的にも正統化していないものだ。

ごく善良と思われる人でも、中絶は女性が自分の体に行うことができる権利だと考えている人が多くいる。もし、胎児が妊婦の体の一部にすぎず、その女性の組織の一部が成長しただけであると云うのなら、中絶を正統化する人の気持ちが悪くなくも無い。次のような意見を良く耳にする。「私が自分の体を好きないようにして何が悪いの？」論

理的には間違っていない。しかし。

胎児が母体とは独立した存在であり、一時的に子宮を仮宿にして栄養をもらっているだけだとしてたらどうだろう。一時的に居所を提供している体とはまるで別個の人間としたら？そうだとすれば、中絶は別の角度から考えねばならないだろう。

このように考えると、中絶はあらゆる人権の中でも最も基本的な権利である生きる権利を侵害するものだと思なされるべきである。その他のすべての権利は、この権利なくしてはあり得ない。すべての権利は、生きることを前提としているからだ。個人の生命の絶対的な価値が崩壊してしまうと、人間の存在などは、権威ある別の人間によって生死が決定されて可なるものとなってしまう。

「胎児」とは、出生前の赤ん坊のことであり、「新生児」とは、出生後用いられる言葉である。「子ども」、「青少年」、「男性」、「女性」、そして、「胎児」もすべて人間に対して用いられる呼び名である。

「胎児」は、独立した生命を持つ人間なのである。医療関係者ですら、この事実を否定しない。法廷でさえ、妊娠六ヶ月の堕胎を禁じ、少なくとも六ヶ月以後は胎児の人権を認めているほどである。

人間の権利は、生まれてから初めて備わるものだ。あくまでも主張されるなら、子宮内で成長を続ける物体は人間以外の何であると言ふのだから。出生前後で生きる環境がこれまでと変わるだけで、胎児と新生児は同じ人間なのではないだろうか。医療関係者は皆、同じ人間だと言ふ。

医学的な論争は終わりをとげた。今や、胎児が独立した生命を持つ一個の人間であることは疑いのない事実となっている。残るは、法律上の問題である。殺人が合法化される時期とは、妊娠のいつ頃までなら、胎児の生命を奪う行為が社会的に受け入れられるかという問題である。

残念ながら、合法であることイコール道德的であると勘違いしている人が少なくない。法廷

や法律制定者が合法であると定めたものは、自分にとって正しいもの」とか、正しさに違いない」になっていくのだ。

道德を合法化できる法律などありはしない。自分の代わりを考えを定めてくれる団体などあるわけがないのだ。政府は権威を用いて人民を管理しても、法廷によって個人の道德観を決定する権力はない。道德は、個人がそれぞれ決めるものだ。

理由もなく軽い気持ちで、政府が代表して行っている行為を自分の倫理観のもととしているなら、常に変わり続けている多数派の気まぐれに自分の道德を委任しているようなものである。

政府が侵すことのできない人権というものがある。いたいかな胎児の生命を奪うかどうか決める権利もその一つである。生きる権利、その生命の自由と所有権は、政府、法廷、立法機関などが確立される前から存在していた。生命は、政府によって与えられたものではない。最初の政府が出現する前より存在し続けてきたのである。

そもそも、意志ある人間が集まって政府を造った理由はなんだったのか。生命と自由を尊重するためではなかったのか。一人一人の人間は、自分を守るために他人をも尊重する。お互いの権利を守るうとする団体には強さが備わっている。このような合理的な理論のもとに造られた政府が、罪なき者を殺すためのものだと信じるのはいかに矛盾している。

不運なことながら、人間の造り出した政府は、本来の目的を忘れる癖があるらしい。社会の一人一人よりも、政府の意見のほうが重要になってきている。あいまいな多数派の意見が、個人の権利を代表することにしているのだ。保護してもらうために造った政府が、人民に反旗をひるがえした例は、歴史上多々ある。

中絶する人が増えれば増えるほど、法律を変えることは難しくなる。日本では、平成元年から五年まで五年間に行われた合法的な中絶



の数、二百十五万九千八百二にも及ぶという。

中絶関係者達には、殺人者としての意識がないのかもしれない。親としての責任感の薄さ、性行為に対する気軽な考え、中絶が法的に容認されていることなどが、「親もどき人」達にとつて中絶を正統化し自己弁護するに十分な要因を作り出しているのだ。

費用は高いが、面倒な技術が必要としないこの手術で利益を得ている医療関係者によって、中絶は支持されていることもある。

墮胎後の胎児を見て精神的な打撃を受けるのは、親である当人達であり、医者や看護婦ではない。生きて脈うっている胎児の死に手を染めている医師に罪悪感などあるのだろうか。本来、人の命を救うことが目的の尊敬すべき職業が、お金のために死の執行人に姿を変えてしまうのは悲劇としかいいようがない。

自由国家は、市民の生命と財産を敬い守ることをしなくなつたら、自由であるとは言えない。民主国家が人民の権利に無関心になると、その国家は、人民は国家に服従すべきと考える野蛮きわまりない国家に変貌する。すると、国家の意思が人民の意思より重要となり、国家の党首がすべての人民の考えを一人決

めしてしまふ。

過去五十年にわたり、我々は「近代」社会が何百万者もの人民を殺りくするのを目撃してきた。そして、それは、その人民本人達が政府に人の生き死にを決定する権威を認めてきた結果だった。

人民の生命を左右する最終的な権威を政府が握った国家、ロシア、ハンガリー、ポーランド、中国などの諸国で組織的な大量殺りくが行われたのをこの目で見たではないか。日本国家が容認した二百十五万九千八百二人の殺人とロシア国家が殺りくした四十七万三千強の人民とは、病院で行われたかどうかの違いではないのではないだろうか。

ある敬けんなキリスト教信者の紳士が書いた記事を紹介しよう。私はこの記事に深い感銘を受けた。

「その少年はレストランの奥の部屋で生まれました。母親はウエイトレスで、彼は私生児でした。彼はある子どももない夫婦の養子に差し出されました。ゲッターで生活しつつも、彼はきちんとした教育を受けました。彼の精神の奥底に、そして心で見えない部分に、微生物と分子と病気の媒体についての興味が大きくなって行きました。一般的な教育課程を終了した後、彼

は医療研究の分野に仕事を見つけた。そこで彼は、ガン治療法の発見につながる十年にわたる研究の第一歩となるものを見出ししました。今では、彼という一人の人間の生命が、何千もの生命を救っています。

実を言うと、これは作り話なのです。彼は本当は一度もこの世で生きることはなかったのです。彼は中絶されました。妊娠二十週目でした。その中絶は、国家と医療機関によって認められたものです。」

ラス・ウォールトンは、この記事を千九百七十二年に書いた。実現しなかった事実について、強烈で胸を引きさくような現実味のある物語である。平成元年から五年まで、日本だけで二百十五万九千八百二人もの未来の医師、主婦、科学者、技術者、教育者、哲学者らが、その才能を育てる機会なく殺害された。彼らがそうならないと誰にも言えないだろう。

中絶法は廃止されるべきだ。「生命」の真の意味を再定義しなければいけない。現行の法律では、「生命」とは「個人」のことであるが、胎児を個人だとは見なしていない。その法を廃止するため行動するのに遅いことはない。

神は、我々を通して新しい生命をもたらして下さるのだ。生

命は、神の創造物であり、人間の創造物ではない。その生命を与えるも奪うも、神がお定めになることだ。

あなたがこの記事を読んでいる間にも、六件以上もの中絶が行われているのだ。

ALLissues1/85p24

## 主のご意志に背いた時の祈り

神様、出産の前、後にかかわらず、  
罪なき人間の命の破壊に  
手を染めているもの達の  
心をお開き下さい。  
彼らの心が和らぎ、  
心の目が開き、あなたの  
真実の光が彼らに向かって  
まっすぐ照らし出され、  
へりくだりと真の悔い改めが  
出来るようにあなたのもとに  
導いて下さい。また、  
今日、私達が行ったあなたの  
ご意志に背くすべての行為について、  
私達をもお許し下さい。

アーメン。

# カトリック流の「コミュニケーション」とは

レイプ犠牲者  
としての信念

第二バチカン公会議に基づく司教の言葉には、プロ・ライフ活動にも共通する部分が多い。中でも「社会におけるコミュニケーション法」の章には、カトリック教徒が社会とどのように接点を持つべきかの指南がある。中絶や安楽死を始めとする殺りく行為の現状を人々に知らしめるのがプロ・ライフ活動の目的ゆえ、これから紹介する書簡は非常に参考になる。

「伝達機関」とはメディアを有効活用する者の総称である」との立場から「効果的なコミュニケーション」が行われるよう使命感を持って取り組む義務がある。報道機関の影響力が増すほど、その責任も重くなる」と語る。

書簡中で多用される「メディア」という言葉は、ニュースや娯楽等のいわゆるマスコミに限定されていない。他人に物事を知らせる、納得させる、説得する等の行為全般を「伝達機関」と見なしている。「若者や未就学者に嗜好や善悪を教えなければならぬ教師にも当てはまる。」

展示、文筆、出版、宣伝など社

会的コミュニケーションの担い手は相当の心構えが必要だ。「誠意、正直さ、信びよう性、これはコミュニケーションの基本中の基本だ。コミュニケーションを円滑にするため、良心や善意だけでは駄目である。真実を伝えるのが先決だ。何はさておき正確な状況描写を。話のまとめ方や伝え手の知的水準によって価値や信びよう性が変わるものでもない」つまり誇張表現は、意図はどうあれ、不要かつ不当である。真実をそのままを伝えよう。

神様に喜んでもらえれば、それでよいのだ。

書簡は宣伝活動にも触れている。(面白いことに「宣伝」を結果を善く、或いは悪くするため意図的に広める情報や考え」と説明している。宣伝といえは、ヒトラーの宣伝担当部下、ジョセフ・ゴッベルスを思い出すが、プロ・ライフ派の宣伝活動の大半は、言わずもがな正当なものである(中には大衆を傷つけ不信感を抱かせる、とんでもない宣伝がある。意図的に真実を曲げ、肉付けし、取捨選択し、都合よく言い換えるなど、情報の受け手

の正当な判断を妨げるのは許しがたい」

肉付け、取捨選択、言い換えは、生命擁護関連の法案を選択する際も「正当に決断する自由の妨げとなる。ひいては、出産にまつわる女性の選択肢をも狭くする。世間に広がっている、中絶についての誤った情報を払拭するのがプロ・ライフ派の最大の使命といえる。この書簡は、われわれカトリック信者にコミュニケーションの原則を教えてくれる。肉付け、取捨選択、言い換えは、中絶に対する人々の嫌悪感を呼び起こすには効果的だろうが、教会ではそのような小手先の操作を禁じている。聖書にもある通り、真実はいずれ明るみに現れてくる(ルカによる福音書 十二：3)。すなわち、話をふくらませ事実を誇張しても、最後に嘘がばれてしまい、自分の信用がゼロにならないまでも傷がつくのは確かだ。

宣伝活動は真実への密着を心掛けねばならない。なぜなら真理はわれわれに自由を得させる(コリントによる福音書 八：32)からだ。

「メディアの存在は家庭内の会話に活気を与える」と書簡にある。誠意、正直さ、信びよう性に基づくコミュニケーションは、社会に生の息吹を与えようとするプロ・ライフ活動が目指す到達点でもある。

スティープ・ダンハム

二年前の状況を振り返るにつけ、自分の赤ちゃんを手放さなくて正解だったという思いが強まる。私はレイプの犠牲者だ。一才半になる娘は、私の人生に常に喜びをもたらし、心を癒してくれる。娘のいない人生など想像もできないほどだ。中絶の本当の意味を知っていたお陰だ。養子というのもよい(難しくもある)解決策だが、神は、私がこの子を育てることを望まれた。いつか私も結婚するだろう。私の状況を前向きに考えてくれる信念をもった男性と出会えますように。神は「悪」をも善に変える力を持つ。私は神の一部であり、世の中にどんな悪がはびころうとも、善をしのぐことはない。

リサ・フェローン

# 日本プロ・ライフ・ムーブメント事務所

「中絶に反対する運動」

〒780高知市新本町一丁目7-31

電話/Fax 0888-73-3619 e-mail: nvt56n@ps.inforyoma.or.jp

## 事務所時間：

月一金 01:00-17:30  
日のみ 10:30-14:00  
土曜日 休み

## 御送金

銀行：四国銀行朝倉支店  
口座番号：0573553  
日本プロ・ライフ・ムーブメント  
郵便局：「郵便振替」  
現在口座番号：01660-5-39607  
日本プロ・ライフ・ムーブメント

## 会員募集

寄付：十万円 五万円 三万円  
一万円 五千元 一千元

無料：毎月プロ・ライフ・ニュースレター

あなたの寄付はまだ生まれていない赤ちゃんを守る運動のため使用させて頂いております。私たちと一緒に小さい命を大切に育みましょう。

## 事務所便り

晩秋に入ると、高知県でも肌寒さを感じる頃となります。皆様、風邪などおひきになりませんように御身体にくれぐれもお気をつけ下さいませ。マザー・テレサが九月五日に亡くなられ、世界中が悲しみに暮れました。彼女は生涯の行ないを通して、受胎の瞬間から自然死でその生涯を終えるまでいのちを強く守ることを私たちに教えて下さった方でした。

さて、新聞でご存じの方も多いでしょうが、障害者への強制不妊手術の問題が、スウェーデン、ノルウェーと次々明るみに出てきました。日本もこの問題は皆無ではありません。厚生省の統計によると、平成七年には優生手術総数は四千八百八十五件となっています。施設にいる障害者にはこの問題は特に身につまされる事でしょう。（詳細については読売新聞 九月二十四日つげを御参照下さいませように。）

九月六日、七日の両日おこなわれた第二回ピリングス・メソッド研究会も担当者のシスター築沢の御努力のおかげで成功のうちに終えることが出来ました。参加された方々からもいろいろ意見が出されました。

尚、事務所には「プロ・ライフ・ニュース」のバック・ナンバーが少しあります。割安で、ご希望の方には一号から八十五号までを一セットにして二千元+郵便料、そして、セットで全部希望しない場合は、希望のニュース一部につき、二十五円+郵便料でお分け致します。在庫がなくなつた分についてはコピーして御送りさせて頂きます。事務所まで電話またはファックスでの御連絡をお待ち致しております。

日本プロ・ライフ・ムーブメント

## 読者の声



ニュースレター#77を14部送って下さい。#78より15部づつ送ってください。私の記事をおのうに大きく取り上げて下さったことを感謝いたします。唯「天条教会」は「五条教会」です。（書き方が雑だったせいと思います。）

北海道 K.M.さん

ニュースレターいつもありがとうございます。次回からは教会で読ませていただきます。

彦根市 M.T.さん

With our best wishes for the success of your important work for Life

鎌倉市 R.さん

この赤ちゃん（胎児でしたね）人形は手頃ですね。今後ともどうぞよろしくお願致します。ありがとうございます。

熊本市 M.K.さん

カラー印刷でとても美しく楽しく読んでいます。しかし、もっと優しく語りかけるような対話があればいいですね文章に。

神戸市 O.K.さん

こんにちは。いつもニュースをお送り頂きありがとうございます。今月から妹が大学に進学したため一人ぐらしを始めました。妹にもこれを機にニュースを読ませたいので、お送り下さいますようよろ

しくお願い致します。（4年間のみ）少ない寄付ですがお役立て下さいませ、横須賀市 K.S.さん

毎月ニュースを送って下さってありがとうございます。いつも充実した内容でプロ・ライフ・ヒーローのコーナーも楽しみでした。私は4月に結婚し、アメリカに住むことになりましたので、ニュースを送っていただくのを止めていただくようお願い致します。アメリカでもプロ・ライフの活動に関わり続けたいと思っています。事務所の皆様この大切な運動を続けて下さっていることにとても感謝しています。これからもがんばって下さい。お祈りしています。

羽村市 S.K.さん

生命尊重、人間の尊重のための日夜の御奉仕を心から感謝申し上げます。

京都市 K.さん

赤ちゃん100部送ってください。

名古屋市 L.C.さん

7月号、教会そして身障者に願うこと、「ロマ法王と若者」に感動しました。頭の悪い私でもよく解りました。すみませんが7月号分より送ってください。お願いします。

栃木県 H.G.さん

お忙しい毎日かと思えます。毎月送付下さり有りありがとうございます。8月下旬より下記へ移転しますので、9月分より下記へお願いします。中・高生女子に「命」について教えたいと思います。

長崎県 I.C.さん